

紋枯病、トビイロウンカ、カメムシ類の防除について

【紋枯病】

葉鞘の水分上昇を妨げ、倒伏しやすくなるため減収の原因となります。
高温多湿を好むので、茎数が多いほ場や猛暑の年に発生が多くなります。
病斑に形成された菌核は、土壌中で越冬し、翌年の伝染源となります。

〈対策〉

防除は、普通期栽培では出穂2週間～10日前に実施し、病斑の上位進展が認められる場合は、補正防除を行いましょう。



停滞型



進行型

出典：福岡県「令和5年度版病害虫・雑草防除の手引き」

(表1) 紋枯病に対する薬剤例

名称	希釈倍率 使用量	散布液量 (ℓ/10a)	使用 回数	使用時期
バリダシン液 剤5	1000倍	60～150	5回	収穫14日前まで

【トビイロウンカ】

今年度は、7月3日に飛来を初確認しています。ほ場により発生程度が異なります。効果的な防除を行うためにも、田回りを行い下図を参考に第2世代幼虫の時期を中心に防除を実施してください。防除薬剤については、水稲暦や注文書を参考にしてください。



注 (1) 发育零点12.0℃、发育上限温度28.5℃、发育停止温度33.0℃、有効積算温度(成虫期間100.0℃・卵期間109.4℃・幼虫期間189.4℃) (2) 気温はアメダス太宰府を使用(7月13日まで実測値、以降は平年値)

(図1) トビイロウンカの発生予想パターン図(第1報: 令和5年7月14日作成)



収穫前の圃場の様子(坪枯れ)



株元の様子(黒ずんでベトベトに)

【カメムシ類】

5月の水稻管理情報No2で情報提供した「イネカメムシ」およびカメムシ類については、**出穂2週間前の畦草除草(本田の飛び込み防止)と、基幹防除が重要です。**下記(表2)の薬剤を参考に適切な防除を行いましょう。



イネカメムシ(左)とミナミアオカメムシ(右)



斑点米(被害粒)

(表2)カメムシに対する薬剤例

名称	希釈倍率 使用量	散布液量 (ℓ/10a)	使用 回数	使用時期
アルバリン 顆粒水溶剤	2000倍	60～150	3回	収穫7日前まで
アルバリン 粉剤DL	3kg/10a	—		収穫7日前まで
エクシード フロアブル	2000倍	60～150	3回	収穫7日前まで
エクシード 粉剤DL	3kg/10a	—		収穫7日前まで

・イネカメムシ: 出穂期(40～50%)に1回目の防除を、発生が多い場所では、出穂期7日後に2回目の防除を検討しましょう。

・斑点米カメムシ: 防除は穂揃期から10日後となります。多発している場合は、穂揃期に防除する必要があります。

※防除にあたってはミツバチへの影響を考慮して行いましょう。